

『おねーさんの耳はロボの耳』 完結編第三話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

11. 老人とセリオ

「少々強引だとは思いますが、研究所の連中が一向に動かないのでな」

大きなリムジンの後部席に座った老人が、傍らにいるセリオにそう告げる。だが、その態度はどう見ても「謝っている」と言うものではなく、目下の者に通告をすと言った感じだった。自分の言葉に対して、反論や意見を挟む余地を見出させないような圧倒感すらある。

「人物評通りの方ですね」

未だに猫かぶりモードの無表情のままセリオが短く答えると、老人は豪快に大笑いをしてから、セリオから視線を正面に移して、つぶやくように答えた。

「はっはっはっ…、お前さんのデータベースにもちゃんとするか。だが、その記載は所詮はうわべに過ぎんさ。そんなデータで人を計ることが出来れば、世の中苦労はないじやろに…」

それはセリオに対する返事と言うよりも、他の誰かに対する老人のつぶやきのようにも見えた。

老人はセリオの反応を気にしてるのかしてないか、セリオの方を見ずにそのまま続ける。「来栖川グループを創った男などと呼ばれるのは、実に馬鹿馬鹿しいと思わんか？ わし一人で何もかも出来るはずもなかるうに…。とかく偉くなってしまおうと、買わんでもいいものばかり買ってしまったて、ろくなことはないな」

老人　　来栖川の創始者にして来栖川グループ総帥。特に最先端技術に興の語り味を持ち、来栖川エレクトロニクスなどの会長職を兼任している口は単なる愚痴に近かったが、突然くるっとセリオの方を向いて、

「それはそうと、いつまでお前さんは猫かぶってるつもりだ？ わしやそんなおすましさんを見たかったわけじゃないんだがな」

と、意地悪そうな笑顔を作ってみせる。

「すべてご存知なのですな」

すましたままのセリオがそう言うと、来栖川老人は笑いながら答える。

「ご存知も何も、お前さんの一件を仕切ってるのはわしじやからの。もともとお前さんには興味があつてな。それと長瀬のところまでHMX12のテストをすることもあつて、それならお前さんにもと思つてな」

「どうしてわたしを選んだのですか？」

「まあそれはそのうち分かるじやろうが…一つ言えるのは、お前さんの笑った顔が見たかったからじゃよ」

その言葉を聞いた時、セリオは何も答えなかった。来栖川老人の言葉が、ある人物に重なり、まるで発声装置が壊れてしまったかのように、何も言えなくなっていた。

来栖川老人もセリオが黙っていることに對して、何も言わずにいた。ただ子どものようにどこか意地悪そうな笑顔を作り、セリオの方を見ている。

「…そうね、せっかく笑えるんだから……」

しばらくの沈黙の後、セリオがぼつりと喋り出した。その口調はもはや猫かぶりモードのすましたものではなく、いつもものおねーさん口調だった。

「怒ったり…悲しんだりするより、笑った方がいいわよね」

そして、初めて来栖川老人に向かって、笑顔を見せた。それを見て、来栖川老人も満足げな笑みを浮かべて、こう言った。

「それでこそ、お前さんを長瀬に預けた甲斐があると言うものじゃない」

この時にしようやくセリオとの意思疎通がなかったことを実感した来栖川老人はふと思い出したように言葉を続ける。

「ところで、買い物途中だったようじゃが、構わなかったのか？」

セリオが持っていた買い物袋を見ての質問だったが、それに対してセリオはやや不満げな表情を見せる。

「あら、そんなこと言うくらいなら、どうしてこんな人さらいみたいな真似をしたのかしら？」

セリオに文句を言われても、来栖川老人は窮することもなく、むしろそれを楽しむような様子を見せながら、悪びれずに答える。

「まあ非常手段じゃよ、非常手段」

「いきなり大きなリムジンが来て、『お前さんが来ないと、関係者に多大な迷惑がかかる

ことになる』なんて脅かされれば、黙って行くしかないでしょ」

来栖川老人の喋りの部分を本人そっくりの声色で再現しながら、セリオがそう返すと、来栖川老人はそれすらも楽しんでいようだった。

「それにしても、本当にお前さんをさらうつもりだったら、そのセンサーやアンテナをどうにかしないことにはいかなあ」

と言いながら、セリオの耳飾り―センサー・アンテナが格納されている部分に軽く触れる。

「まあ、通常モデルだとこれが取られたら、かなりセンサー能力が落ちるわね。でも、わたしは元々のセンサー能力が通常モデルと桁違いだから、下がったとしても通常モデルよりはかなりあるのよ」

「それは頼もしい限りじゃな」

セリオの能力が通常モデルと桁違いと言うのは、あながちうそではない。試作モデルゆえに、細部に渡って贅沢な作りがされているのだ。それだけに予備のボディと言うものが存在しない。もちろん通常モデルのボディで代用することは出来るが、著しく機能が低下してしまう。これはマルチについても同じことが言える。

「ところで、この車はどこまで行くのかしら？ あんまり遅くなると、余計な心配をさせちゃうから、出来れば適当なところで帰して欲しいけど」

ふとセリオが車の窓を眺めて、言い出した。時間にして、すでに三十分以上が経過している。だが、来栖川老人は表情を変えすることもなく答える。

「そうじゃな、ちょっと今日はわしに付き合ってもらいたい」

「何かあるの？」

とセリオが短く聞くと、来栖川老人も短く、

「いや、何もなし」

と一言だけ告げる。

「じゃあ、どうして？ あなたがわたしのことを気に入って、わたしを身近に置きたいと言うのは分かったけど、ちょっと急じゃないかしら？」

来栖川老人を相手に、セリオの勢いは何ら変わることはない。いや、ここで相手が来栖川だからと言って萎縮してしまうようなら、来栖川老人もセリオを気に入ったりはしないだろう。

そのセリオの態度は来栖川老人にとっては心地よいものであった。だからこそ、こうして会話を楽しんでいるのだ。だが、この時のセリオの質問に対してだけは、突然それまでとは違った遠い目で一言つぶやくだけだった。

「…何もない、からじゃよ」

その時の来栖川老人からは、総帥や会長としての威圧感など微塵も感じられなかった。

その姿を見て、セリオは来栖川老人の思惑を悟ったのか、
「そう。それじゃ、ひとまず適当なところで電話させてくれないかしら？ それにこの車にも電話くらいしないの？」

と明るい調子で尋ねるのだった。つまりは、老人に付き合うと言う意思表示なのだ。

「あるぞ」

「じゃ、貸して」

「が、使えんのだ。電源も回線も切れてるからな」

とセリオに受け答えする来栖川老人の方も、すっかり元の調子に戻っていた。

「どーしてそんなことになってるのよ？」

「わしゃ人気者なんで、ファンからの電話が引つ切り無しじゃからの。車の中でくらいゆっくりさせてもらいたいじゃろ？」

「本当に緊急の用件はどーなるの？」

「その時は専用の無線が、運転席の方にある」

と言いながら来栖川老人は運転席の方を指差した。

「それじゃあ電話は？」

「まあ待て。もう少ししばらくで屋敷に着くから、そこで掛けるといい」

「ホントに呆れたご老人ね」

それまでのやり取りを経て、セリオがため息混じりにそう言うと、来栖川老人は怪訝そうな表情でそれに返事をする。

『『ご老人』とか『会長』とか呼ぶのは止めてくれんかな？ そうだな…せめて『おじい様』とでも呼んでくれ』

「それって『ご老人』と大して変わらないと思うけど…」

セリオが控え目に反論しても、来栖川老人は変わらぬ調子で食い下がる。

「いいから、そうしてくれ」

「はいはい。ホントにわがまなな…おじい様ね」

困ったような表情で来栖川老人を見ながらそう言ったが、困った中にどこか楽しそうな

印象を感じさせるセリオだった。

しばらくして、車が止まった。

「着いたようじゃな」

「それじゃ…」

と車が止まったのを受けて、セリオが降りようとすると、来栖川老人はそれを制止した。

「いや、お前さんが動くことはない」

毅然とした口調で言い放つ来栖川老人の言葉に、困惑を隠せないセリオはドアに手を掛けた状態のまま答える。

「でもこういう場面では普通、ロボットが先に降りて、ご主人様を迎えるものでしょ？」

「お前さんは単なるメイドロボットじゃないし、わしがお前さんのご主人様と言うわけでもないじゃろうに」

確かに現時点ではセリオの正規登録ユーザーは藤田浩之と言うことになっている。だが、来栖川老人が言ってるのは、正規登録のことだけではないことをセリオは理解していた。

「それはそうけど…いいのかしら？」

「構わんよ」

と来栖川老人が短く言ったところで、ドアが開いた。どうやら、運転手が先に降りて開けてくれたらしい。

「だんな様、どうぞ」

短く告げる運転手の声に、セリオはわずかに戸惑いを見せていた。

「さあ、セリオ。先に降りてくれんと、わしが降りれないぞ」

しかし、来栖川老人に急かされたので、軽く会釈しながら車を降りて、すぐに運転手の横に並び、来栖川老人を待った。

「基本的にわしゃ堅苦しいのは嫌いなんだがなあ…。ま、行くぞ、セリオ」

「はい」

車から降りてすたすたと歩く来栖川老人の後に、セリオは運転手に向かって深々と礼をしながらついて行った。もちろん、手には買い物袋を持って。

セリオは屋敷の中に連れて行かれ、大きな居間らしき部屋に案内された。なお、そのセリオを案内したのはHM13型「セリオ」、即ち自分と同じ外見を持つメイドロボだった。

「こちらでお待ちください」

セリオを案内してくれたもう一人の「セリオ」は丁寧だが無表情のままそう告げて、静かに部屋を出て行った。

何となく複雑な面持ちでセリオは入り口のそばに立っていた。座ってもよかったのかも知れないが、さすがにそれには抵抗があるらしい。こうしてセリオが立ったまま部屋の中を見渡していると、来栖川老人がやってきた。

「待たせたな」

着替えをすませた来栖川老人が入ると、セリオは苦笑しながら、

「セリオモデルをお使いとは、いいご趣味ですわね、おじい様も」

と答えた。

「そんな皮肉はやめてくれんか。それに別にわしはお前さんをメイドとして、ここに連れてきたかったんじゃないしな」

「メイドロボットをメイド以外の何に使おうって言うの？ 夜のお相手？ それならそれでも構わないけど」

どこかにトゲを含むセリオの言葉に、来栖川老人は何も反論もせず、ただ黙って近くにあった椅子に腰をおろした。

「それだけが目的ってわけじゃあないでしょ？ もし本当に大した用件じゃないなら、浩之さんのところに帰らなきゃ」

それは来栖川老人の車に乗せられて以来、初めて口にした浩之の名前だった。すると、それに反応するかのように来栖川老人が静かに喋り出した。

「大事な人と言うわけか…」

「そりや当然よ。それに夕食の買い物に出て、そのままこっちに来ちゃったから、さぞかしお腹を空かしてるんじゃないかしら」

「あっさりと言ってくれるの、お前さんも。わしの周りの連中もお前さんくらいにはつきりと物が言えるようなら、まだよかったかも知れんな…」

不意に来栖川老人の顔に、年相応の寂しさと言うものが見えていた。

「あら、周りが皆こんなだったら、大変で身が持たないわよ」

と言って笑うセリオを、穏やかなまなざしで見つめる来栖川老人。

「それはそれで面白いと言うものじゃよ。さぞかし毎日が楽しくて楽しくて、死ぬことすら忘れてしまうさ」

「それはいいじゃないの。それならいっそのこと、わたしと同じタイプをもっと作ってみる？」

相変わらず軽口をたたくセリオに、来栖川老人も笑いながら答える。

「そーじゃのお、それはいいかも知れんな。うん、次のモデルはその路線で考えて行くことにしようじゃないか。わっはっはっはっ……」

だが、その笑いが不意に止まった。

不審に思ったセリオが来栖川老人の様子を見ながら、そっと尋ねる。

「どうしたの？ おじい様？」

「…お前さんやマルチは非常に希な例なんじゃよ。藤田君にしても、お前さんとマルチを作った長瀬たちHM研究所の連中にしてもな。大体HM12に感情が組み込まれなかったのは、コストと言うのが一番の理由だったかも知れんが、同時にそれはいいわけに過ぎないんじゃ。わしとしては、ロボットにも個性と言うものがあつて然るべきと思ってるのに、社会的にはまだまだお前さんたちを受け入れる余裕がない」

社会的に受け入れる余裕がないと言うことは、誰もが感じていた。そのためセリオの猫かぶりモードであり、マルチのダミーの耳飾りなのだ。技術的にはもっと人間に近づけることは可能だった。

独白のように、来栖川老人の言葉は続いた。聞く相手としてはセリオが適當だったのかどうかは関係ないかのように。

「しかし、世の中には藤田君のような人物もいる。だから、わしは見極めてみたかったのじゃよ、自分の目で。感情を持ったロボットがどれほどのものかと言うことをな」

そこまでで一旦言葉を切つて、来栖川老人はふと顔を上げて、また喋り出した。ただし、それまでの口調とは違って、暗いものはなかった。

「それに、お前さんにはちよつと思ひ入れがあつてな」

「何かしら？」

セリオが首をかしげると、来栖川老人は逆にセリオに質問をする。

「お前さんは誰をモデルにしてると思う？」

「モデル？ そう言えば、その辺の情報は何もなかったわね」

「ま、当然じゃな。これを知ってるのは極めて限られた者だけじゃし」

意地悪そうな笑顔を作りながら、来栖川老人はまだはつきりと答えを言わない。だが、はぐらかされた当のセリオは、それでも平然としている。

「有名人でもモデルにしたの？」

「うむ、ある意味では有名人に違いないな。…要するにわしの孫どもなんじやよ」

セリオの反応が今一つ面白味に欠けたのか、結局すぐに来栖川老人が折れてしまったが、それに対するセリオの反応もやや冷たい。

「もしかして、それって親馬鹿のようなもの？」

「そうかも知れんな」

と言いながら来栖川老人は苦笑する。あるいは照れ隠しのつもりだったのかも知れないが。

「だから『おじい様』なのね。それで、肝心の本物はどうしてるのよ？」

「無事に暮らしてるんじゃないか？」

「何だか冷たいわね」

「なあに、わしがいくら余計な気を回したところで、あの子らにはもう要らぬお節介にし

かならんで。芹香が未だに人付き合いが下手なもの、わしが構いすぎたせいもあるしな」

「またもや苦笑しながらの返事。そこには起業家・実業家としての成功者ではなく、孫のことで悩む一人の老人の姿があった。」

「寂しいご老人ね」

「そうじゃよ。だから、お前さんにいて欲しいと言ってるんじゃないか」

「来栖川老人はどこか冗談めいた言い方をしてた。それに対して、セリオは見極めかかっていたので、わざとはぐらかすような言い方をする。」

「おじい様もなかなかはっきりと言うじゃないの」

「お前さんなら強がる相手でもなかるうに。それにわしだって周りすべてを騙しとおすことは出来んよ」

「その苦笑混じりの来栖川老人の言葉は、セリオを納得させるのに十分だった。」

「そこまで言われちゃ、かなわないわよね、ホントに」

「セリオがふうと小さくため息をつくとき、来栖川老人は態度をころりと変え、笑顔でセリオに向かつて言う。」

「そーかそーか。それじゃ甘えついでに、お前さんの持つてる材料で何か作ってみてくれんか？」

「まあ、ホントにいい性格してるわねえ…。ま、せっかくだからご希望に沿うようにしてあげる。ただし、連絡だけはさせてね」

「そうじゃな。それと、これからのことは彼に言うのかね？ ま、わしもこうしてお前さんと話す機会が保証されるんなら、別段急ぐ理由もないしな」

「そうね。今回のことをざっと説明して、詳しい話は後日おじい様と浩之さんが直接話した方がいいんじゃないかしら？」

セリオが一瞬の思考を経た上で意見を述べると、来栖川老人はまじめな表情でそれに応える。

「どっちにしても、今夜は一度帰るといい。そのお前さんの夕食を食べたら、お前さんを送るついでに藤田君に会って話をしようと思うがの」

「わたしとしてはそれでいいけど、おじい様はホントにそれでいいの？」

「なあに、焦ることもないさね。藤田君にしてみれば、いきなりお前さんがいなくなるのを喜びはしないだろう」

「さらってきた人の言葉とは思えないわね」

「実際にお前さんと話してみても、そう思ったのさ。それだけお前さんは魅力的ということなんじゃよ」

「そーよねー、やっばり」

来栖川老人の褒め言葉を受け、当然のようにそれを肯定するセリオ。そんなセリオを見て、愉快々と豪快に笑う来栖川老人。

しばらくの間、その部屋には楽しそうな二人の笑い声が響いていた。同じ頃の浩之たちの慌てぶりなど、まったく知らずに…。

（続く）

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第三話

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第三話

初版:1997/10/16

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/08

PDF書式変更:2016/05/09